

修士論文概要

ベテラン韓国人日本語教師のライフヒストリーから見る
教育観と実践変容の軌跡

韓国の日本語教育の新しい展開を目指して

崔鉉弼

早稲田大学大学院日本語教育研究科

2011

1. はじめに

韓国の日本語教育は日本国外において世界最多の日本語学習者と教育機関を擁している(国際交流基金 2006)といわれながらも、これまでは日韓対照言語学的立場からの研究が中心であり、必ずしも教師自身や教師の実践については扱われてこなかった。しかし、以下に挙げるような 6 つの観点から教師および実践そのものを対象とした研究が喫緊の課題と考えられる。6 つの観点は 1)日本語教育の中身は 1 つひとつの教育実践からなること、2)日本語教育の実践主体は教師であり、教師は自分の教育観に基づいて実践を行っていること、3)韓国の日本語教育の現場において非日本語母語話者教師(以下、韓国人日本語教師)の役割は非常に大きいこと(平畑 2008)、4)韓国の日本語学習者の 8 割以上を占めている中等教育における日本語教育は近年、軽視且つ縮小される傾向にあり、現場の教師の苦悩が深刻化していること、5)近年、韓国における日本語の地位の低下によって日本語教育悲観論が広がっていること(任 2009)、6)韓国の日本語教育の現場において教師間でありのままの実践の共有はほとんどされておらず、それぞれの教師の実践の改善には限界があることである。また日本語教育の実践に目を向ける際に、教育実践には教師の教育観が色濃く反映され、教師の教育観は変容し、さらに実践に影響する(館岡 2010)ことから韓国人日本語教師の教育観の変容と実践への影響の軌跡を探ることは重要な意義をもつといえる。そこで、本研究では韓国のソウルにある普通私立人文系高校(以下、A 高校)の 1 人のベテラン韓国人日本語教師(以下、J 教師)のライフヒストリー¹を通して J 教師の教育観と実践変容の軌跡を探り、現在の韓国の日本語教育の問題を把握する。また、J 教師のライフヒストリーと授業観察の分析結果を統合して考察し、現在の問題を乗り越え、韓国の日本語教育に新しい展開をもたらすための試みを具体的に提案する。

2. 研究目的

本研究では、以下の 3 点を研究目的とする。1 つ目は、J 教師のライフヒストリーを通して彼の教育観と実践変容の軌跡を探ることである。2 つ目は、現在の J 教師の授業を観察し、現在の J 教師の教育観は実践にどのような影響を及ぼしているのかを探ることである。3 つ目は、J 教師のライフヒストリーと授業観察の考察を通して現在の韓国の日本語教育の問題を把握し、この問題解決のためには何が必要なのかを提言することである。この 3 つの目的の達成によって、J 教師と同じ社会文化的文脈(sociocultural context)におかれている韓国人日本語教師にこれまでの自分の実践を振り返り、教育観を明確化するプロセスの重要性とそのプロセスを教師間で共有することを促すことができると考えられる。また、J 教師の 20 年間の韓国人日本語教師としての人生を通して韓国の日本語教育の過去と現在を把握および吟味し、現在の問題をありのまま捉え、その問題の解決のために必要な試みを具体的に提案する。この提案によって、現在の韓国の日本語教育における悲観論を払拭していくことができ、韓国の日本語教育に新しい展開をもたらすことができると考えられる。

¹ 社会や文化の諸相や変動を読み取ることを目的とし、個人の人生の語りを研究者が解釈を行って個人誌として再構築したもの。

3. 調査概要

本研究の研究方法は大きく2つからなる。1つは、ライフヒストリー・インタビューで、もう1つは授業観察である。インタビューはJ教師に3回、計193分を行い、3回目のインタビューの前には2回の授業観察を50分ずつ、計100分を行った。調査協力者の選定に当たっては、Goodson & Sikes(2001)のライフヒストリーにおける調査協力者選定のための6つの条件²を参考とした。観察対象クラスはJ教師が「授業をやりやすいと思う商経課程クラス(以下、I組)」と「授業をやりにくいと思う人文社会課程クラス(以下、H組)」である。J教師には半構造化インタビューを行い、インタビュー内容はICレコーダーで録音した。授業観察に当たっては完全なる観察者の立場から授業を観察し、その場でフィールドノーツを作成し、授業の様子はビデオカメラで録画した。研究倫理については、所定の過程と書式を通してJ教師からも、観察対象クラスの生徒からも同意を得て、万全を図った。

4. 分析結果

4.1 分析の観点と手順

インタビュー内容は全て文字化し、佐藤(2008)の説明を参考とし、定性的コーディングを行った。コーディングを通しては一定の共通点を有するコードで計45個のカテゴリー(以下【】で表示)を立ち上げた。本研究ではJ教師の人生に転機をもたらした出来事をライフイベントと称し、ライフイベントに分析の焦点を当てる。なお、授業観察の録画データも全て文字化し、フィールドノーツを併用して分析した。福島(2001)では「学校の授業には多くの制約(生徒の配置や座り方、喋っていいことと悪いこと、教師のふるまいや所作の限界など)が存在し、その制約という核から逸脱する場合は事件と呼べる」と述べている。J教師と生徒にとっては日本語の授業はルーティン(日課)であるが、部外者である筆者にはルーティンの制約から逸脱し、衝撃を与える出来事、つまり事件が起こる場であった。この事件への教師の対応には、その教師の実践知と教育観が強く影響するため、本研究では、授業中の事件とその事件に対するJ教師の対応と教育観に焦点を当てて分析する。

4.2 分析結果

J教師のライフヒストリーの分析を通して、J教師の教育観は個人的イベントと教職的イベントからなるライフイベントが変容のきっかけとなっていることが明らかになった。具体的に、＜子どもは愛で＞という根幹となる教育観から＜体罰を使ってでも＞、＜魅せる授業で＞という教育観が枝分かれして変容しており、この教育観の枝分かれはJ教師自身の教育観の明確化の過程であると解される。この過程を経て現在のJ教師は＜初心に戻って子どもは愛で＞というゆるぎない教育観を確立していることが

² Goodson & Sikes(2006) pp.29-31 を参照。

分かった。J 教師のライフストーリーと教育観の変容の軌跡を次のページの図 1 で示す。

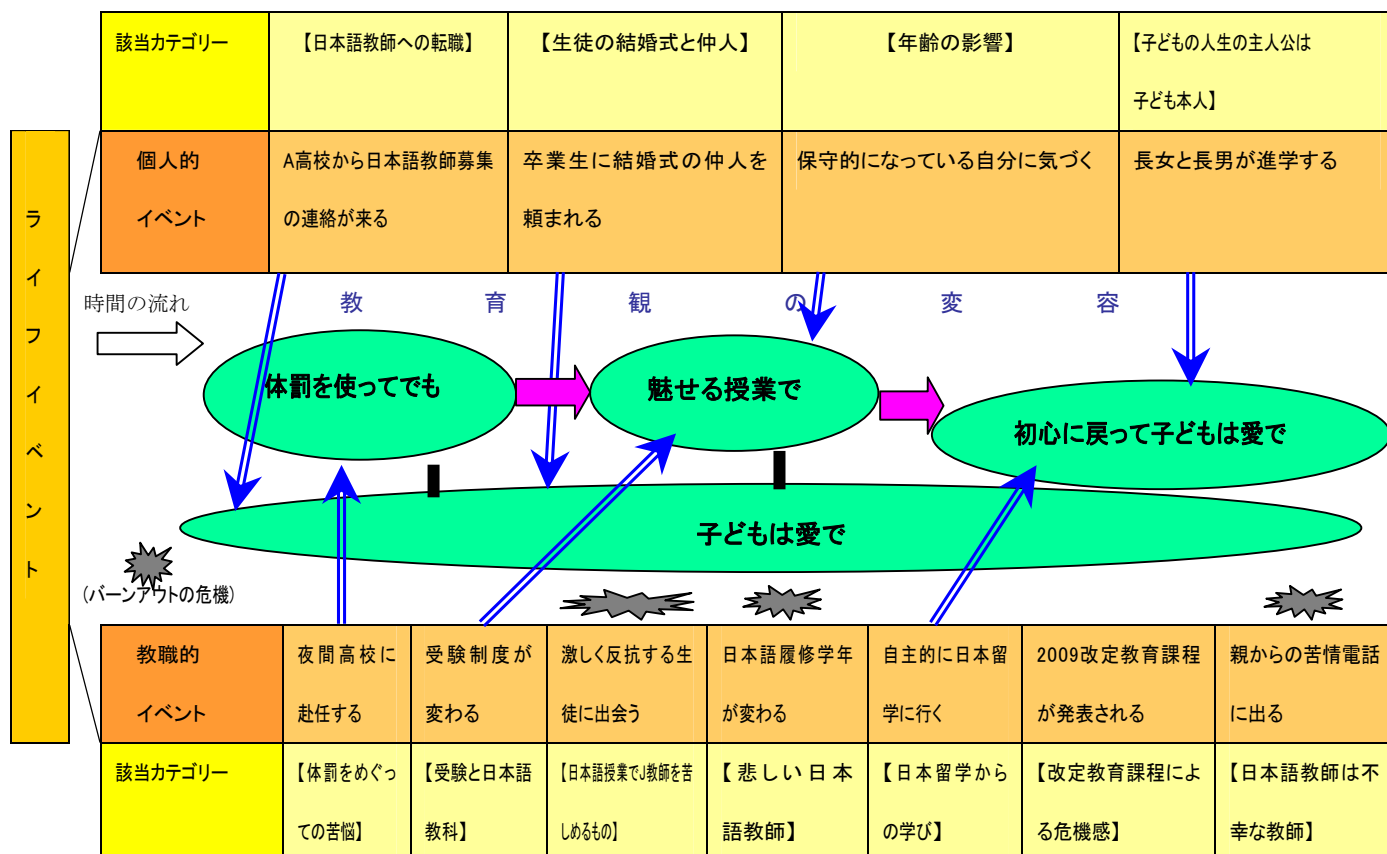


図 1 J 教師の教育観の変容の軌跡

I 組での観察では、J 教師は「初心に戻って子どもは愛で」という現在の教育観に忠実に基づいて教室運営をしていることと自分の目指す教室作りを実現していることが分かった。また、I 組での「教室の後ろに立たされた生徒が教師の指示なしで席に戻ってしまう」という事件には特に対応していなかったが、これは J 教師が授業に夢中になって後ろに立たされている生徒のことを忘れてしまったからであることが分かった。H 組の観察では、J 教師は生徒たちの無気力さのため、本人も授業への意欲を失っていることが分かった。H 組では「いきなり生徒が出ていってしまう」、「寝てしまう生徒が続出する」、「授業に何の反応もしない生徒が続出する」の 3 つの事件があった。J 教師は「いきなり生徒が出ていってしまう」という事件には「怒るより生徒のことをかばう」ことで、「寝てしまう生徒が続出する」という事件には「親の心で優しく起こす」ことで、「授業に何の反応もしない生徒が続出する」という事件には「教師研修での学びを取り入れ、スムーズに反応を促す」ことで対応していた。それぞれの事件への対応は＜初心に戻って子どもは愛で＞という現在の教育観に支えられていることが分かった。

5. 考察

本研究では、日本語教育の観点から、J 教師の＜魅せる授業で＞から＜初心に戻って子どもは愛で＞

への教育観の変容には注目すべきであることを主張する。J 教師の教育観の変容が教室運営や授業デザインに大きく影響を及ぼしていることが分かるからである。J 教師は<魅せる授業で>から<初心に戻って子どもは愛で>へと教育観が変容したことにより、授業デザインも教師主導の一斉授業から協働学習に変わっている。この変容によって、J 教師の教室における役割も変わり、知識の伝授者としての教師ではなく、支援者としての教師になったのである。この「教育観の変容→授業デザインの変更→教師の役割の変容」は教育実践はまさに教育観に支えられていることを裏付けており、省察と行動による教師としての J 教師の成長を反映しているといえよう。また、J 教師は現在<初心に戻って子どもは愛で>というゆるぎない教育観を確立しており、教師が自分の実践をよりよくして成長するためには、自分の教育観の明確化の過程が重要であることが分かる。その過程において「他者との語り合い」と「自分と自分の実践の省察」、「省察を通しての行動」が大事であるといえよう。しかし、J 教師の語りと先行研究から、現在の韓国の教師文化には「互い干渉しない主義」、「孤立主義」、「個人主義」があり、教師間での教育観と実践の共有はほとんどされていないことが浮き彫りになった。

授業観察を通しては、H 組には I 組とは違い、特殊目的高校への受験失敗という競争からの脱落を経験しており、無気力に陥っている生徒が多いことが分かった。また、J 教師も競争の教育による生徒たちの学びからの逃走に苦悩しており、現在、J 教師と H 組の生徒たちは競争の教育という同じ文脈の中で I 組のような活気あふれる教室作りができていないと推察できる。H 組の生徒たちの無気力さによる活気の欠如は、競争の教育の弊害に因るものと考えられる。この問題と関連し、本研究では韓国の日本語教育には教師が主体となって競争の教育を克服するという課題があることを主張する。

J 教師のライフヒストリーと授業観察の分析結果を統合して考察した結果、現在の韓国の日本語教育は教育制度と教師文化による問題を抱えていることが明らかになった。韓国の教育制度の変化による中等教育における日本語学習者の学習意欲の無さとそれによる韓国人日本語教師の苦悩の深刻化、学校教育における日本語教科の軽視、競争の教育の蔓延による学習者の無気力さなどである。何よりも、これらの諸問題の解決と克服の主体である韓国人教師たちは「互いに干渉しない主義」、「孤立主義」、「個人主義」に陥っていることが浮き彫りになった。そこで、本研究では、韓国人日本語教師が主体となって教師文化を「対話の文化」、「共同³の文化」、「協働の文化」へと変革していくべきであることを主張する。上記のような教師文化の変革とともに教師と教育研究者間、また教師間の協働を進め、ボトムアップ式で韓国の日本語教育に新しい展開をもたらす試みが切実に必要と考えられる。

6. おわりに

本研究では、J 教師のライフヒストリーを通して、J 教師の教育観は個人的イベントと教職的イベントからなるライフイベントが変容のきっかけとなっていることを明らかにした。また、授業観察を通し

³ 本稿では「きょうどう」の漢字を意図的に使い分けている。「1人ではなく複数の実践主体が力を合わせる」という意味では「共同」を、「共通の目的をもつ複数の実践主体が対等な関係で新しい実践を作り上げる」という意味では「協働」を使っている。

て、J 教師の教育観は J 教師のどの授業にも矛盾なく影響していることが明らかになった。なお、J 教師のライフヒストリーと授業観察の分析結果を統合して考察した結果、現在の韓国の日本語教育は教育制度と教師文化に因る問題を抱えていることが浮き彫りになった。そこで、本研究では教師と教育研究者間と教師間の協働を通してボトムアップ式で現状を変革していくべきであることを主張した。本研究では、現在の韓国の日本語教育の問題解決のために「協働実践研究」を提案する。本研究では、「協働実践研究とは、複数の教育実践主体が自分の目指す教室に向けて、力を合わせてそれぞれ新しい実践を作り上げていく循環のプロセス」と定義する。協働実践研究は、教師と教育研究者間の協働に関するものであるレッスンスタディ(Lesson Study)を大枠とし、実施時には教師間の協働に関するものである「Think Together プログラム」を取り入れる試みである。協働実践研究は、韓国の日本語教育の現在の問題をボトムアップ式で解決できる試みとなり、韓国の日本語教育に新しい展開をもたらす期待できると考えられる。

参考文献

- 秋田喜代美&キャサリン・ルイス(2008)『授業の研究 教師の学習—レッスンスタディへのいざない—』明石書店.
- 伊藤大輔(2007)「Thinking Together プログラム開発を通じた教師集団の学び」『関西大学人間活動理論研究センター Technical Reports』No.5, pp.65-88.
- 国立国語研究所(2004)『日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究 韓国アンケート 調査集計結果報告書』国立国語研究所.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析—原理・方法・実践』新曜社.
- 佐藤 学(1997)『教師というアポリア—反省的实践へ』世織書房.
- 館岡洋子(2008)「協働による学びのデザイン—協働的学習における『実践から立ち上がる理論』」細川英雄・ことばと文化の教育を考える会(編著)『ことばの教育を実践する・探求する—活動型日本語教育の広がり—』pp.41-56, 凡人社.
- 平畑奈美(2008)「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割」『日本語教育論文集 世界の日本語教育』18, pp.1-19.
- 福島真人(2001)『暗黙知の解剖—認知と社会のインターフェイス』金子書房.
- Goodson, S., & Sikes, P.(2001) *Life history in educational settings*. Open University Press.高井良健一・山田浩之・藤井 泰・白松 賢(訳)(2006)『ライフヒストリーの教育学—実践から方法論まで』昭和堂.
- 任荣哲(2009)「韓国における日本語の位相—中国語との比較を中心に」『韓国日本語教育学会』48, pp.127-141.(임영철(2009)「한국에 있어서의 일본어의 위상—중국어와의 비교를 중심으로」『한국일본어교육학회』48, pp.127-141.)